



明治期における宮城女学校のバイブル・ウーマンの活動 ～明治後期の年次報告から～

宮城学院女子大学 一般教育部准教授 栗原 健

明治期の東北におけるキリスト教宣教において、キリスト教女学校関係者から成るバイブル・ウーマンが果たした役割についてはよく知られている。彼女たちは家庭や病院を訪問して聖書を読み、日曜日には教会の礼拝や日曜学校において奉仕を行い、各地の伝道者を助けていた。宮城女学校出身のバイブル・ウーマンによる活動の内容については、その一員として活躍した吉田みさをに関するメアリー・ホーイ夫人の報告書が、『天にみ栄えー宮城学院の百年』（宮城学院、1987年）の288-290頁に掲載されている。しかしながら、これは1892（明治25）年という初期の時代の記録であり、バイブル・ウーマンの活動は長年にわたり継続して行くことを考えると、ホーイ夫人の報告のみではその全貌を把握することはできない。

幸いなことに、明治30年代から大正期にかけて改革派教会外国伝道局宛てに送られたバイブル・ウーマンの活動報告が、米国ペンシルベニア州ランカスター神学校内の福音・改革派歴史協会（ERHS、Evangelical & Reformed Historical Society of the United Church of Christ）に保存されている。2019（令和元）年8月に東北学院大学の資料調査チームと共に行ったERHSでの調査の際、1905（明治38）年春から1919（大正8）年春までの年次報告書を複写することができた。以下に掲載するのは、レナ・ズーフル校長の名で記された1905（明治38）年5月30日付の報告、1908（明治41）年6月19日付のリディア・A・リンゼイの報告、1909（明治42）年6月1日付のケイト・I・ハンセンの報告の原文並びに邦訳である¹。

1

最初の報告では、7名のバイブル・ウーマンの活動内容や人となりで紹介されている。筆跡は明らかにズーフルのものではなく、言葉遣いも英文としてはぎこちない。おそらく、ズーフルの指導を受けながら日本人の助手が記したものであろう。筆者については定かではないが、冒頭で紹介され、「私の教師であり助け手（my teacher and helper）」と呼ばれている川合きくの（結婚後は吉田姓）かも知れない。当時の女学校関係者の英作文能力

¹ レナ・ズーフルは宮城女学校第3代校長（在職期間：1894年～1908年）。リディア・A・リンゼイ（英語）、ケイト・I・ハンセン（音楽）は1907（明治40）年に共に来日し、戦争による中断を挟みながら1951（昭和26）年まで約40年にわたり宮城学院と歩みを共にした。

がうかがえる資料となっている。

報告書には、「オソノサン」「オチヨサン」と情愛を込めた呼び方が混じることもあり、障がいを抱えつつ熱心に活動を展開するメンバーへの敬意、厳冬の角田に旅する者の苦勞への気遣いがにじみ出ている文章も登場する。報告中で興味深いのは、上遠野たつのが荒町日曜学校と並んで「Shujikan」を訪ねているとの記述である。これは1879（明治12）年に完成した宮城集治監のことであろう。1903（明治36）年には「宮城監獄」と改名されていた筈であるが、ここでは旧い呼称で呼ばれている。

Miyagi Jo Gakko,
Sendai Japan. May 30th, 1905.

Dear Dr. Bartholomew:-

I herewith send a brief sketch of the work of each of the Bible Women who are employed here in Sendai. Their pictures were sent home a year ago in connection with the reports for the 25th Anniversary Report. I do not have pictures of any new Bible Women as the girls of the Class of 1904 and 1905 were all self-supporting except one and she is my personal helper and teacher. Two of the girls of the above mentioned classes became regular Bible Women very recently. One went to Tokyo and I have no special report of her work as yet. I mention the above so that you may understand why there are not many pictures sent for Bible Women just now. I will send the pictures of these two later. We were not certain whether they would stay permanently for the work, but they now think they will stay at least a year. I do not have reports of women working in Tokyo and Yamagata at present so will send theirs later with the report of general work of all the Bible Women.

Dr. Bartholomew we beg all of the patrons to pray especially for those whom they support.

With regards and kind wishes,

Respectfully submitted
Lena Juhl.

1919年8月 複製 1917年 5月 16日 1922年 4月

Miss Kawai.

Miss Kawai whom we have assigned to Mr. G. H. Moose, Drys Mill N. C. is not a Bible woman but a teacher in our Girls School now. She teaches some of the Bible Classes in the lower grades. She is a very valuable worker in that place. She also teaches other classes. The last seven months she was my teacher and helper and taught in the school, and the last three in addition to work mentioned acted as matron of our Girls School. She is one of our most staunch workers and a very strong Christian.

Miss Midori Kamno

Miss Midori Kamno assigned to Third Church Missionary Society care of Miss A. C. Pracht, 615 Franklin Street, West Baltimore Maryland, has been working under direction of Mrs. Lampe. She goes to Fukuda for Sunday School work once a week, this is a long and difficult trip but she and the other Bible woman going there have done excellent work. She also attends Sunday School and meeting every Sunday evening at Aramachi, also woman's meetings once a week at the same place. Besides this she visits the homes of that Kagisho (or preaching place). She has been very faithful in her work. With part of her small earnings she helps to clothe her younger sister who is now in school.

Miss Kama Niwa

Miss Niwa is Bible woman under the direction of Mrs. Cook. She attends woman's meetings and Sunday School at Nagamachi and also helps at prayer-meetings Sunday evening service and Sunday School at Nibancho. She also does visiting with Mrs. Cook and helps in various other ways to extend the Gospel.

Miss Tatsuno Kadono

Miss Tatsuno Kadono goes to Shujikan and Aramachi. Sunday School every Sunday and to Sunday evening service at Aramachi. She has charge of a meeting at Fukuda once a week for women and children. She helps in many other places where extra workers may be needed, such as at the Gospel Tent meetings. Miss Kadono being lame cannot get about as freely as others but still she is able to do a great deal for the Master!

Miss Sono Sekiguchi

Miss Sekiguchi goes to Shiroishi and Ogawara every Sunday for Sunday School. She has charge of the womans meeting at Miyamachi and goes to Arai Sunday School, and teaches some lady knitting several times a week. This lady is also receiving Bible instruction. O Sono San also helps out wherever needed. There are always calls for extra work to be done, such as special meetings, and tent meetings. She is very young and so cannot be sent out to distant points of work, but she does her work very well. Her father is a Jinricksha Man in Tokyo.

Miss Chiyu Takahashi

Miss Takahashi goes to Shiroishi and Ogawara for Sunday School every Sunday. She also goes to the womans meetings at Masuda. The trip to Shiroishi and Ogawara is a hard one. She also attends some of the prayer meetings in Sendai. O Chiyu San was sick for several months this winter, but has now entirely recovered. She is one of the patient and plodding kind of workers.

Miss Kanmari Yomiki

Miss Yomiki Kanmari had been a self-supporting girl while in school. She was out of school almost two years and was then engaged to a young man who expects to become an evangelist. She thus asked to be given work and said she wanted to begin work for the Lord. She goes to womans meetings at Masuda once a week, and to Nagamachi Sunday School, but attends prayer-meetings and assists wherever needed. She goes to Hakuda once a week with one of the other Bible Women. This is a very hard trip especially in winter. A long ride in Jinricksha, Basha (Omnibus) and a ride in the train. During the past winter when the trains were so very irregular on account of transferring of soldiers, the trip was anything but pleasant and easy. We often felt sorry for these Bible Women.

宮城女学校

仙台、日本。1905年5月30日

親愛なるバーソロミュー博士

当地仙台で雇用されております各バイブル・ウイメンの働きの短いスケッチを、ここにお送りします。彼女たちの写真は1年前、25周年記念の報告と一緒に送りしてあります。新しいバイブル・ウイメンの写真は、私の手元にはありません。1904年・1905年クラスの娘たちは、私の個人的なヘルパー兼教師役の1人を除けば、全て自費生徒だからです²。上記クラスの少女のうち、2名はごく最近、常勤のバイブル・ウイメンとなりました。1人は東京に行きましたが、彼女の仕事については私はまだ特別な報告はありません。私がこのことを言及したのは、現在お送りできるバイブル・ウイメンに関する写真がなぜ多くないのかをご理解頂きたかったからです。この2名の写真は後ほどお送りしましょう。彼らがこの職務に長期的に留まれるかは、私たちにもまだ定かではありませんが、彼女たちは、少なくとも1年は残れると今は考えております。現時点では、私は東京と山形で働いている女性たちに関する報告はありません。彼らのことは、後ほど全バイブル・ウイメンの全般的活動に関する報告と一緒に送りしましょう。

バーソロミュー博士、パトロンの方々皆様に、彼らがサポートしている人々のために祈って下さるようお願いいたします。

心をこめて、

謹んで提出いたします。

レナ・ズーフル

ミス・カワイ [川合きくの]

ノースカロライナ州ドライズミルのG・H・モース氏に割り当てられましたミス・カワイは、バイブル・ウーマンではありませんが、現在私たちの女学校の教員です³。彼女は低学年の聖書クラスのいくつかを教えています。職場において彼女は大変貴重な働き人です。彼女はそれ以外のクラスも教えています。過去7か月の間、彼女は私の教師であり助け手であり、学校で教えていました。後半の3か月においては、先に言及した仕事に加えて私たちの女学校の舎監もしています。彼女は最も信頼できる働き人の1人であり、大変強いクリスチャンです。

² Self-supporting students. 奨学金を受けずに学んでいた本校生徒。

³ モースについては詳らかでないが、文脈から察するに、おそらくミッションの支援者であり、その奨学金が川合に送られたのであろう。

ミス・ミドリ・カンノ [狩野みどり]

ミス・ミドリ・カンノは、メリーランド州西ボルティモア、615 Franklin Street ミス・A・C・プラハト方の Third Church Missionary Society に割り当てられ、ミセス・ランペの指導のもとで働いています⁴。彼女は週に1度、日曜学校での職務のために角田に行きます。これは長く面倒が多い旅ですが、彼女と他のバイブル・ウーマンたちは素晴らしい働きを為して来ました。彼女は日曜学校、毎週日曜夕の荒町での集い、また同じ場所における週1回の女性の集いにも参加しています。このほかに、彼女は講義所（または説教場）の家々を訪問しています。その職務において彼女は非常に誠実です。僅かな稼ぎの一部をもって、彼女は現在学校にいる年若い妹に衣類を与えてあげています。



ミス・コマ・ニワ [丹羽こま]

ミス・ニワはミセス・クックの指導のもとにあるバイブル・ウーマンです⁵。彼女は、長町における集いと日曜学校に出席し、また二番丁での日曜夕の祈祷会と日曜学校も助けています。彼女はまたミセス・クックと共に訪問も為し、福音を広げるためにその他さまざまな手段で助けています。



ミス・タツノ・カドノ [上遠野たつの]

ミス・タツノ・カドノは毎週日曜、集治監と荒町日曜学校、荒町での夕拝に赴いております。彼女は週1回、福田での女性と子どもたちのための集いも担当しています。助け手が必要なその他多くの場所、たとえば福音テントミーティングを彼女は助けています。ミス・カドノは足に障がいがあるため、他の者ほど自由に動き回れませんが、主のためになお彼女は多くのことを成し遂げることを得ています！



⁴ モースの場合と同様、ミッションの支援者であろう。「ミセス・ランペ」は、東北学院で1900年から1903年まで理事・英語教員として勤務していたウィリアム・E・ランペ宣教師の夫人である。

⁵ 「ミセス・クック」は、1903年から1905年まで東北学院で聖書を教えたハーマン・H・クック宣教師の夫人である。

ミス・ソノ・セキグチ [関口その]

ミス・セキグチは毎週日曜、日曜学校のため白石と大河原へ赴いています。彼女は宮町での女性の集いを担当し、荒井日曜学校に行き、週に数回女性たちに編み物を教えています。この女性たちは聖書の指導も受けております。オソノサンは、助けが必要な所ではどこでも助けています。特別集会やテントミーティングのように、追加の活動の召しが常にあるからです。彼女は大変年若いため、遠方での働きに派遣することはできませんが、自身の職務を大変よくこなしています。彼女の父は東京の車夫です。



ミス・チヨ・タカハシ [高橋千代]

ミス・タカハシは毎週日曜、日曜学校のために白石と大河原に行きます。彼女はまた、増田での女性の集いにもいつも赴いています。白石と大河原への旅は厳しいものです。仙台での祈祷会のいくつかにも、彼女は出席しています。オチヨサンはこの冬、数か月にわたり病気でしたが、現在は完全に回復しております。彼女は忍耐強くコツコツ働く種類の働き人です。



ミス・カンナリ・ヨミキ [金成よみき]

ミス・ヨミキ・カンナリは学校に在学中は自費生徒でした。彼女はほぼ2年学校を離れており、その後、伝道者になると期待されている若い男性と婚約しました。このため彼女は仕事を与えてくれるようお願い、主のために働き始めたいと述べました。彼女は週1回、増田での女性の集い、長町日曜学校に赴きますが、祈祷会に出席し、助けが必要なところではどこでも助けています。週に1回、他のバイブル・ウーマンと共に角田に行きます。特に冬期にはこれは非常に辛い旅です。人力車、馬車（乗合馬車）と列車による長い旅なのです。昨冬、兵士の輸送のため列車の運行が大幅に不規則になりました時には、この旅は全く不快で困難なものとなりました。私たちは、これらのバイブル・ウイメンのためにしばしば申し訳なく思っております。



1908 (明治41)年6月にリンゼイがタイプした報告書においても、バイブル・ウーマンたちの熱心な責任感が賞賛されており、悪天候などの際に職務を休みがちな「日曜学校教師」と対比する一文も見られる。ただし、高給を選んで他の雇用先に移る女性もいたことが言及されており、メンバーの出入りが少なくなかったことが読み取れる。手紙の末尾においてバイブル・ウーマン養成のための教育機関設立の希望が述べられているが、同様の主張は後年の報告書(例えば1914年6月10日付のクリストファー・モスによる報告)においても繰り返されることになる。バイブル・ウーマンの影響力が顕著になるにつれて、当時の宮城女学校における聖書教育では十分な知識と経験を与えられないことが、学校関係者の目にも明らかになって行くのである。

1908

REPORT ON EIBLE WOMEN'S WORK.

To the Board of Commissioners for
Foreign Missions of the Ref. Ch. in the U. S.,
Dear Brethren:

In all ages and in all countries, in the history of the Church women have done and are doing a great work for Christ's Kingdom. The Japanese women are no exception to this rule. Though Japan does not keep her women so closely secluded in the home as other eastern nations, yet we find that the great work of bringing women to Christ must be done largely by their own sex. The most aggressive of these women who are working so faithfully to bring a knowledge of Christ into their sisters' lives are the Eible Women. The majority of ~~our Eible Women~~ are graduates of Miyagi Jo-gakkō. Many of them were supported during their school life by the Mission or by individuals who were interested in them personally. But I am sure that it is not only ~~through~~ through a feeling of obligation to the Mission or of gratitude to their benefactors that these girls enter the ranks of the Eible Women. They have the love of Christ in their hearts, and through that love the desire of service for His Kingdom.

The work for the past year has been carried on by 23 women. Ten of these were girls who had graduated in March, 1907. These girls lived in the "Eible House" at the school, and pursued the Post-graduate Course, doing out for their work on Saturdays and Sundays and at other times outside of school hours when the work needed them. Their Post-graduate Course was finished last March, and then they were sent out to live in different towns and cities to assist the evangelists of those places. They do this in various ways. Unless the evangelist's wife can play the organ, the Eible Woman must do this and lead the singing so necessary to any church service. She is an important factor in the Sunday School, where she teaches a class and looks after all the children in general. If any children are absent, she finds out the reason. If new children come, she tries through them to enter the home, first in a social way, and then perhaps to teach the Word of God. She visits those who are sick and comforts those in sorrow. She also has charge of the Women's Prayer Meeting and the Sewing Circle, where she has need of all the executive ability that her school training has developed. So we find her a busy, faithful home missionary.

I have been, naturally, more in touch with the work of the Eible Women who remain in the school, and with the work of our under-graduates, who voluntarily offer themselves for the work. From the class which graduated in March of this year we have five girls who are taking the Post-graduate Course in the school. In addition to these, Mrs. Zaugg's, Miss Hansen's and my helpers are in the Eible House. Twenty-two girls from the upper

three classes have volunteered to help in the Sunday School work of Sendai and the neighboring towns. These girls could teach a lesson, patience and faithfulness to many Sunday School teachers at home. No matter how hard it snows, nor how hard it rains, they never complain or think of staying at home. Many of them have to ride from three to five miles in jinrikishas, while others must get up very early to take the train to their stations. Some teach in one town in the morning, and then go on to a different town where the Sunday School is held in the afternoon. And their classes are usually not the tastefully dressed children that anyone would delight to teach in America or in Japan, but they are for the most part dirty and unkempt. Often on their backs are tied crying babies, which they must stand up to "joggle" while their teacher is trying to make them understand some beautiful Bible lesson.

Each year, of course, some of the Bible Women leave the work-- some to enter homes of their own; some to go on with their education; and some to engage in other employment where they receive much higher wages. While the last fact may seem discouraging, yet it is partly compensated for by having other girls leave secular employment to become Bible Women.

When the students of North Japan College finish the Literary Course in the school, we do not consider them fitted to become efficient evangelists, to go out and teach the people about Christ, though they have studied the Bible throughout their Literary Course. But they must go on through three years of special preparation and study in the Theological Seminary. To be able assistants to these evangelists, to be able to do well and effectively the wide scope of work open to Bible Women, we feel that they too should have a special training in the Bible and methods of Christian work beyond that received in their Literary Course. Just as the work at home has felt the need and has demanded trained Christian women for the Sunday Schools, the Young Women's Christian Association and the Deaconess work, so the work here is demanding specially trained Bible Women. So we hope that in the near future our Mission may have what many other Missions already have-- a school where our Bible Women can become better equipped to hasten the coming of the Kingdom to Japan.

Respectfully submitted,

Sendai, Japan, June 19, 1908.

Lydia A. Lindsey.

バイブル・ウイメンの働きに関する報告

アメリカ合衆国改革派教会外国伝道局 理事会へ

親愛なる兄弟たち

あらゆる時代、あらゆる国において、教会の歴史では女性たちがキリストの王国のために偉大な働きを果たしており、[現在も] 為しつつあります。日本女性たちも、この定則の例外ではありません。日本では、女性たちは他の東洋の国々ほどは厳しく世間から離されてはいませんが、女性たちをキリストに導くという大きな働きは、おおむね同性の者によって為されなければならないということに、私たちも気付いております。キリストの知識を同胞の人生にもたらそうと誠実に働いている女性たちのうち、最も意欲的なのがバイブル・ウイメンたちです。私たちのバイブル・ウイメン [原文下線]のうち、大半は宮城女学校の卒業生です。このうち多くの者は学校生活の間、伝道局、または彼女たちに関心を寄せた個人によって支援された者です。しかし、これらの娘たちがバイブル・ウイメン

の職に就いたのは、決して伝道局に対する恩義や支援者への感謝からのみではないと私は確信しております。彼女たちは自身の心にキリストへの愛を持ち、この愛によって、御国のために働く望みを抱いているのです。

昨年度の働きは23名の女性たちによって為されました。そのうちの10名は、1907年3月に卒業した娘たちです。これらの娘たちは学校の「バイブル・ハウス」に居住し、特別聖書科〔一年制聖書専攻科〕を履修しつつ、土曜・日曜にそれぞれの職務に赴きました⁶。それ以外の時には学校の課外時間に、彼女たちを必要とする働きに出かけています。彼女たちの特別聖書科は昨年3月に終わり、その後は、当地の伝道者たちを補助するために他所の町や都市に派遣されています。彼女たちはこの務めをさまざまな形で果たしております。伝道者の夫人がオルガンを弾けない場合は、バイブル・ウーマンがこれを弾き、歌をリードしなくてははいけません。どの礼拝であれ〔音楽は〕必要だからです。彼女は日曜学校では重要な存在です。クラスを教え、子どもたち全員を世話しています。もし欠席する子どもがいれば、その理由を調べます。新しい子どもたちが来れば、彼女は子どもたちを通じて彼らの家庭に入るように試みます。最初は社交として、それから、もしや神の御言葉を伝えられたらと。病人を訪ね、悲しみにある人を慰めます。女性の祈祷会や裁縫サークルも担当しますが、そこでは、学校で鍛えられた管理能力が全て必要になります。ですから、彼女は働きが多い誠実な家庭宣教師なのです。

当然のことですが、私は、学校に残っているバイブル・ウイメンたちの働き、またこの活動のために自ら志願した本科生の働きのほうにもっと精通しております。今年3月に卒業したクラスからは、5名の娘たちが特別聖書科を学校で履修しています。これに加え、ミセス・ザウグ、ミス・ハンセン、それに私のヘルパーたちがバイブル・ハウスにいます。3つの上級クラスの22名が、仙台や近隣の町での日曜学校を手伝うために志願しました。彼女たちは、家にいる多くの日曜学校教師たちに忍耐と誠実さのことを教えることが出来ましょう。いかに激しく雪が降ろうが雨が降ろうが、彼女たちは不平一つを言うこと無く、家に留まることなど考えません。彼女たちの多くは3マイルから5マイルも人力車に乗り、他の者は列車に乗るために非常に早く起床しなくてはならないのです。ある町で午前中に教え、午後には日曜学校が開かれる別の町に行くという者もいます。通常、彼女たちのクラス（に来るのは）、アメリカや日本において教えることが嬉しくなるような小ぎれいな身なりの子どもたちではなく、大体は汚れてぼろぼろ〔の者〕です。しばしば、彼らは泣きわめく赤ちゃんを背中にくくりつけており、教師たちが麗しい聖書の学びを教えようとしている時でも、「よしよしするjoggle」ために立ち上がらなくてはならないのです。

もちろん、毎年数名のバイブル・ウイメンが職を離れます—自分の家庭に入る人もいれ

⁶ 特別聖書科〔一年制聖書専攻科〕は、1900（明治33）年に一年制の聖書科が創設され、その後1916（大正5）年に聖書専攻科となった。

ば、[さらなる]教育のためという人もおり、もっと高給を受け取れる別の雇い口に行く人もいます。最後の要因についてはがっかりさせられるように見えますが、これも、他の少女たちが世俗の仕事を離れてバイブル・ウイメンとなってくれることにより、部分的には埋め合わされております。

東北学院の学生が文科を修了した場合、私たちは彼らが外に出て人々にキリストを教えるに十分な伝道者たり得るとは考えておりません。彼らは文科に在学している間じゅう聖書を学んで来たのですが、[なお]神学校において3年の特別な準備と学びを受けなくてはなりません。これらの伝道者の良きアシスタントとなるため、バイブル・ウイメンに開かれている幅広い職務をよく効果的に行うためには、彼女たちも本科で受ける学びだけでなく、聖書とキリスト教的活動についての特別なトレーニングを受ける必要があると、私たちは感じております。家庭における働きの需要が感じられるようになり、日曜学校、**Young Women's Christian Association** と執事の働きは訓練されたキリスト教女性を求めています。近い将来、私たちのミッションも、他のミッションがすでに持っているもの—私たちのバイブル・ウイメンが日本への御国の到来を早めるために良く備えられる学校—を持つことができるよう、希望しております。

謹んで提出いたします。

リディア・A・リンゼイ

仙台、日本、1908年6月19日

3

翌1909(明治42)年の報告は、リンゼイと親しかったハンセンが記している。冒頭に登場するバイブル・ウーマンたちとの最初の出会いの印象などは、公的な報告と言うよりも軽快な手紙という雰囲気があり、重厚なリンゼイの書き出しとはかなりトーンが異なる。ただし、この報告においても「ミッションが神学校を持っていない」ことのハンディがさり気なく言及されている。多くのバイブル・ウーマンの退職の理由は「普通の原因」であることわっていることは、決してスキャンダルからではないことを念押ししたかったためであろう。

REPORT OF BIBLE WOMEN'S WORK, JUNE 1908 - JUNE 1909.

MIYAGI GIRLS' SCHOOL.

Sendai, Japan, June 1, 1909.

To the Board of Commissioners for Foreign Missions,
Reformed Church in America.

The subject, "Bible-women", suggests one of the numerous surprises of the writer's first weeks in Japan. One day it was announced that the Bible-women connected with the school had come to pay their respects, and instead of the expected middle-aged or elderly women, there filed into the room a number of girls in school-girls' costume, none of them seeming over twenty years old, all of them shy but graceful, and some of them very pretty, with charming manners. These girls had just graduated from the school, and were beginning their year of post-graduate work, preparatory to being sent out to smaller towns as Bible-women, and it is such as they who comprise the great majority of the present force on our field. There are a very few widows working as Bible-women; but as the Mission has no Bible school, it must depend for workers almost entirely upon the graduates of the Girls' School.

The work of these young women is of necessity chiefly among the children and the young girls. They are certainly faithful in this. Even those still in the post-graduate course, who are giving most of their time to their studies, all help with at least onewomen's meeting a week, and attend two Sunday schools each Sunday, where they teach classes, and those who can, play the organ and lead the singing, not only for Sunday School, but also for church services. One of the objects of special effort during the past year has been an increase in their efficiency in these respects. In this effort the school has had able assistance from Mrs. W. G. Seiple, who is giving regular instruction in singing to the girls in the post-graduate course. One girl who has recently gone for work to a small town in the mountains, writes, "When I was in school, I was the poorest in music of all the girls; but the people here are very happy, because I can play hymns and teach them to sing."

A Japanese "old maid" being so rare as to be a negligible quantity, our youthful Bible-women cannot remain in the service for many years; a five or six years' term is the exception. However, many of them marry evangelists, and thus remain in the work permanently, while the others gain influence as Christian wives and mothers.

There have been a number of resignations during the past year, mostly for "the usual reason". These, however, have been more than balanced by the number of new girls entering the work. Perhaps the most gratifying feature has been the number of applicants for positions, who have been self-supporting during their school course. In the course of the year, out of thirteen applicants who had never been in the work before, eight had been self-supporting. This is an increase over the numbers of former years, which speaks well for the growing interest in Christian work among our educated young women.

Respectfully submitted,

(signed) KATE I. HANSEN.

バイブル・ウイメンの働きに関する報告 1908年6月－1909年6月
宮城女学校
仙台、日本、1909年6月1日

アメリカ合衆国改革派教会外国伝道局 理事会へ

この話題、「バイブル・ウイメン」は、筆者〔ハンセン〕の日本での最初の数週間の中で体験した数限りない驚きの1つです。ある日、学校とつながりがあるバイブル・ウイメンたちが挨拶に来たと言われましたが、予想していたような中年または高齢の女性ではなく、女学生の装いをした娘たちが列になって部屋に入って来ました。20歳を超える者はおらず、皆恥ずかしがりですが上品であり、幾人かは大変可愛らしく、チャーミングな物腰です。これらの娘たちはちょうど学校を卒業したばかりで、小さな町へバイブル・ウイメンとして派遣される準備として、特別聖書科の学びを始めたところなのです。私たちの活動分野にあっては、彼女たちのような者が今ある働き人のうちの多数を占めます。バイブル・ウイメンとして働いている未亡人もごくわずかにいます。しかし、[私たちの]ミッションは聖書学校を持っていませんので、働き人としては女学校の卒業生に全く依り頼まなくてはいけないのです。

これらの若い女性たちの仕事は、主に子どもたちや若い少女たちの必要にあてられています。彼女たちは間違いなくこの〔職務〕に対して誠実です。卒業後コースにて、ほとんどの時間を勉強のために費やさなくてはならない者も、皆少なくとも1つの女性の集いを週1回は手伝い、毎週日曜に2つの日曜学校に参加してクラスを教えます。可能な人はオルガンを弾いて歌唱をリードします。それも日曜学校のためだけでなく、教会の礼拝のためにもです。昨年特に努めたことは、この点において彼女たちの能力を増やしたことです。そのために、学校はW・G・セイプル夫人の有能な助けを借りました。夫人は特別聖書科で歌唱の定期的指導を行っています。最近、山中にある小さな町に仕事に行った1人の娘は、このように書いています。「学校にいた時には、私は全ての女の子たちの中で音楽が一番できていませんでした。しかし、ここの人々は、私が讃美歌を歌えて彼らに歌うことを教えることができるので、とても喜んでくれています。」

日本では、「Old maid」は珍しく、ほとんどいません。[ですから]私たちのバイブル・ウイメンもこの奉仕に長年とどまることはできません。5年か6年の任期は例外です。しかしながら、彼女たちの多くは伝道者と結婚しますので、それによってこの仕事に長期的に残ることになります。他の者も、クリスチャン妻や母として影響力を持ちます。

昨年は何件かの退職がありましたが、ほとんどは「普通の理由 (the usual reason)」からです。しかしながら、これは、新たにこの職務に就く娘たちによって埋め合わせされています。おそらく最も感謝すべきことは、在学時は自費生徒だった者でこの職への志願者が

多いことです。昨年度は、この仕事が未経験だった志願者 13 名のうち、8 名は自費生徒でした。過去の年々の志願者数よりも増加しており、教育を受けた若い女性たちの間でキリスト教的職務への関心が増していることを物語っております。

謹んで提出いたします。

ケイト・I・ハンセン

【謝辞】

本稿をまとめるにあたっては、訳語の選択などについて宮城学院資料室の佐藤亜紀氏から大きな助けを受けた。「ミセス・ランペ」「ミセス・クック」の身元その他について、東北学院史資料センター調査研究員の日野哲氏からも情報を頂いた。貴重な史料の複写することができたのは、ERHS 事務局長のアリソン・マリン氏の温かいご厚意による。2019 年夏の ERHS での調査は、宮城学院嶋田順好学院長のはからいによるものである。この場を借りて篤く御礼を申し上げたい。